

## 佳作

今も未来も大切にしたいもの  
福島県いわき市立植田中学校  
2年 小澤 茉衣

私は、今13歳。中学2年生だ。今年の夏休みも新型コロナと共に過ごすことになるだろう。ただ、去年と違うのは、新型コロナの感染者の増加が止まらない中、3年ぶりの行動制限がない夏になるということだ。それにより、帰省客や観光客が増え、コロナも感染拡大するだろう。でも、今年の夏休み、私にはどうしても頑張りたいことがある。どこから手をつけていいのかわからない山ほどある宿題よりも大切なものが……。

私は、吹奏楽部に所属している。入学した頃、特に入りたい部活もなく、でも何かしら入らないといけないだろうという安易な気持ちでいた。そんな私を変えてくれたのが吹奏楽部だった。対面式で演奏を聴いた瞬間、私の心は奪われた。私もやってみたいと思った。そして、迷うことなく入部届を出した。この日から、私の青春が始まった。

パート分けで、パーカッションに決定した私は、これから相棒になるであろう初めましての打楽器たちの前にいた。先輩たちに挨拶をして、何をしたいかわからない私に

「茉衣ちゃんは、シンバルお願いね。」

と先輩の声。なんと3カ月後の吹奏楽コンクールに、私はシンバルと共にそのステージに立つというのだ。音楽未経験者の私がみんなと大会に出るなんて想像もできない。不安しかなかった。でも、先輩たちは、いちから丁寧に教えてくれた。

「茉衣ちゃんなら大丈夫。」

この魔法のような言葉に救われ、だんだん形になってきたシンバルの輝く音と共に、部員全員で支部大会、県大会、東北大会へ行きたいという欲さえ湧いてきた。

一生懸命頑張った私の初めてのコンクールは、支部大会金賞、県大会金賞だったが、惜しくも東北大会には手が届かなかった。この悔しい気持ちをバネに、来年の夏は絶対に東北大会に出場すると心に誓った。

それから1年後。私にも待ちに待った後輩ができた。新体制でのコンクール。バスドラムとクラッシュシンバルを任された。

5月の半ば、私は体調に異変を感じ、1カ月入院し練習を離れることになった。

元気になり、久しぶりに聴いた合奏は一体感があり、あまりの迫力のすごさに感動した。支部大会まで2週間。私の居場所があるのか不安になった。私は、この気持ちを顧問の先生に相談した。

「今回は、コンクールまで日にちがないし、復帰したばかりで頑張りすぎると体力と精神的にも負担がかかると思う。だから、今回はサポート側にまわって県大会から一緒に頑張らないか。」

と言われた。私は正直悔しかった。出場したかった。もしかしたら、3年生と演奏できる最後の機会かもしれないと思ったら涙が込み上げてきた。でも、落ち込んでるひまはない。みんなのために、今私ができることを全力でやるしかないんだ。そんな時に思いついたのがお守り作りだった。部員30人、先生2人合計32個。ひとつひとつに気持ちを込めて作った。悔いのない最高の演奏をしてほしい。ただそれだけだった。自分が出場しないからといって、何もやらないのではなく、できることをやり、みんなと同じ目標に向かって進んでいこうという前向きな気持ちで、支部大会当日を迎えた。ステージ袖にいる私は誰よりも緊張していた。そんな私に、先輩と保護者の方が声をかけてくださった。

「支部大会一緒に出場できないのは、本当に悔しいけど、私たちが頑張ってる茉衣ちゃんのために県大会獲得するから見ててね。」

「大丈夫だよ！ 心配することない。みんな茉衣ちゃんのために必死で練習したから、絶対県に連れて行ってくれるよ。」

と言われ、緊張がほぐれた。

いざ本番。呼吸がそろろう。緊張感に包まれた空気の中で、みんなの想いを乗せ、メリハリのある演奏に鳥肌が立った。素晴らしかった。観客席からあふれんばかりの拍手。県大会を勝ち取ることができた。

私は、みんなに迷惑がかからないように必死で頑張った。最後まであきらめることなく本番では、周りの音をよく聴いてずれないように集中して取り組んだ。今の実力を精いっぱい出せた。だが東北大会には届かなかった。本当に悔しい。悲しい。でも、次は私たちの代だ。最後まであきらめないで進んでいきたい。

友達や仲間、支えてくれる人に感謝を忘れずに、応援してくれる声を力に変えて、目標に向かって一生懸命頑張りたい。誰も未来はわからない。未来を変えられるのは、今の自分だ。後戻りはできない。今を全力で突き進め！ 仙台育英学園高等学校野球部、須江監督の言葉が好きだ。「青春ってすごく密」。コロナなんかには負けてられない。もっと青春するぞ！